

【千鳥】ちどり

数多く群れる鳥を千鳥、百千鳥(ももちどり)などといいますが、通常歌語で千鳥といえばチドリ科の鳥の総称として使われることが多いようです。

千鳥は河原・海岸などの水辺に住み、夜も鳴く鳥です。必ずしも渡り鳥ばかりではありません。全長 15cm から 20cm くらい、足の指が三本で後指がないのが特徴です。

千鳥は俳句の世界では冬の季語に属しますが、万葉・古今の世界では冬に限るものではなかったようです。冬に定着し始めたのは鎌倉時代からで、冬の題に挙げた歌集は『堀川百首』が初見です。

以降、春は鶯・夏は時鳥・秋は雁、そして冬は千鳥として季節の代表的風物に定着していったのです。

・近江の海夕波千鳥なが鳴けば心もしのいにしへ思ほゆ 『万葉集』柿本人麻呂

この歌のように『万葉集』では千鳥は湖や川など淡水に群れる鳥として詠まれていたようですが、

・淡路島かよふ千鳥の鳴く声にいくよねざめぬ須磨の関守 『金葉集』源兼昌

のように、後には海岸に群れる鳥として詠まれるようになりました。

群雀(むらすずめ)が実りの豊かさを表すのに対し、千鳥は冬の荒涼とした空間を表しています。海であれ川であれ、千鳥は姿より鳴き声を詠んだものがほとんどです。

千鳥の擬声語は近代歌謡に数例見られますが、「チッチッ」「チンチン」などいずれも chi の音が主となっています。

鳥の名称は擬声語から付くことがあります。千鳥の名称は群れる生態と擬声語がみごとに重なっていますね。

千鳥の最古の擬声語は「八千代」でしょう。

・しほの山さしでの磯に住む千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴く 『古今集』

このよみ人知らずの賀歌が千鳥に吉祥の位を授け、現代に至るまで多くの蒔絵・螺鈿などの意匠に採り上げられる根拠となってきました。

平安時代の〈沢千鳥蒔絵螺鈿小唐櫃〉金剛峯寺蔵。鎌倉時代の〈千鳥蒔絵手箱〉東京国立博物館蔵などの国宝・重文にも佳作が見られます。

茶道具の世界でも千鳥は清らかな声で囀り飛び交っています。ご一緒にウオッチングしてみましよう。

ノンコウ七種の黒楽茶碗、銘「千鳥」は有名ですね。胴部の掛けはずしの黄釉を見立てた覚々斎原叟の銘で現在藤田美術館にあります。

「千鳥石」は賀茂川石の別名で、庭石や黒楽の釉薬として用いられています。

「千鳥茶巾」は茶巾のたたみ方の一種、「千鳥板」は千鳥茶巾を置く三角形の板、これらは流派によっては縁がないかもしれません。

「千鳥の盃」は茶事の初座で懐石料理を終えた後、八寸と酒を持ち出しての盃事です。盃が主客の間を交互に行き来するためにそう呼ばれています。これは本来、茶事の後後段の酒宴での所作と思われます。いつの世にか後段を略し懐石に付けたのでしょう。

「千鳥の香炉」は竜泉窯青磁香炉。脚より高台が高く三脚が宙に浮いていることから脚を鳥に見立てて銘となりました。徳川美術館蔵の他に同手のものが数点伝わっています。

『茶話指月集』には千鳥の香炉に関する逸話が三話記されています。

①利休に妻宗恩がこの香炉の脚の長さが高すぎるので短くするよう進言し、一分切った。（『洗心録』には脚の長さが不揃いなので一本を短くするよう進言したとある）

②蒲生氏郷と細川幽齋が利休から満月の夜会に招きを受けたとき、氏郷が千鳥の香炉の拝見を所望したところ利休が急に不機嫌となった。幽齋は「清見がた雲も迷はぬ浪のうへに月の隈なるむら千鳥かな」という順徳院の歌を思い出し、月が見えなくなつては困るからだとして利休の心を察した。

③利休は藪内紹智の招きで雪の暁に千鳥の香炉を懐中し出かけ、迎えに出た紹智に暖をとるようと差し出した。すると、紹智も同じ思いで懐中の香炉を差し出し、二人は香炉を交換した。

この他にも『絵本太閤記』には石川五右衛門が秀吉を襲いに伏見城に忍び入ったら千鳥の香炉が鳴きだし、五右衛門は捕り押さえられたという話があります。これほど多くの逸話を持つ香炉は他に例を見ないでしょう。

現代でも茶器、香合などに千鳥はお馴染みですね。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

～ Copyright (C) 2011 ～私の書齋～ 森田文康. All Rights Reserved.～